



新作痛快推理

岩崎警視シリーズV

新・翔んでる警視V

胡桃沢耕史

kosaido blue books

新・翔んでる警視V

KOSAIDO BLUE BOOKS

著 者 胡 桃 沢 耕 史

発 行 者 足 立 貫 一

発 行 所 廣 済 堂 出 版

〒105

東京都港区芝2-23-13

電話 03-453-1201代

振替 東京8 164137番

印 刷 所 株 式 会 社 廣 済 堂

ISBN4-331-05216-8 C0293

©1986 胡桃沢耕史

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

新・翔んでる警視V

胡桃沢耕史

目次

PART I 成立しない殺人	7
----------------	---

PART II 夕子へ	49
-------------	----

PART III できぬ捜査するが捜査	89
---------------------	----

PART IV ぶら下がり族教祖の死	130
--------------------	-----

PART V 断じて他殺です	172
----------------	-----

PART VI 春は殺人と共にきた	214
-------------------	-----

PART I 成立しない殺人

〈エイズの正体〉

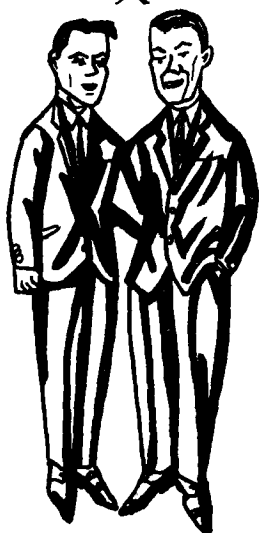
エイズという、絶対治すことのできない難病が、突然発生してから、三、四年になる。主に男子同性愛者を中心に伝染するが、このごろではその因子を持った血液を輸血した人々の間にも広がってきて、社会的問題になっている。最近では男と女の間にも伝染すると言われてきた。

何しろ絶対治らない上に、一年以内の死亡率が七十パーセントという高率で、かかったらもうどんな人でもそれで最後だ。

その治療薬を作ろうにも、病原菌の正体が分からなくてはどうにもならない。

それでまずハーバード大学のがん研究所が、専らこの研究に取り組んで、最近やっとこの、エイズのウイルスの正体を突き止めたと言われる。

それによると、白血病ウイルスと非常に似ており、がんの一種でもあるが、免疫のときに働く、



その中の因子の一つヘルパーTという細胞が違い、一方は白血病を起こすのに、一方はあらゆる免疫性を皮膚から失わせて、次から次へ治療不能の難病を発生させる、エイズになるといふことだ。

1

警視庁玄関に迎えにきて待っていたのは、まるで総監でも乗りそうな大きな黒い車であった。内閣総理大臣自らが輸入品使用運動を提唱している現状であるから、当然、アメリカかヨーロッパの外車だろうが、前の席に乃木、後ろの席に、進藤部長刑事、岩崎警視、最近岩崎が指揮する捜一の二係に入ってきた夏目正子そっくりの原田、の三人が坐った。ゆったりとした広い横幅のふんわり柔らかい座席、四人とも何だか自分が急に偉くなったような気がする。

しかし単純には喜んでばかりいられない。

いきなり、さつき総監からの直接の電話が捜一課長を通じて入ってきたのだ。

「捜一の二係の岩崎警視は、警視が最も信頼する部下三人を連れて、私服で十分後に正面玄関で待っていてくれ」

ちょうどそれぞれが庁内の大食堂で昼の食事をすませて、部屋のテーブルに戻ってきたのを、まるで待っていたかのような、急な命令であった。

「身分を示すための警察手帖のみを所持し、手錠、捕縄、警笛等は、とりあえず今回は不要である。改めて打ち合わせの上、逮捕計画が整ってから、もっと大きな装備で、緊急出動という事態になる。

二係はまず、これが犯罪であるかどうかを行ってたしかめてくれ」

そういう要請であった。

まだ何が始まるか、全く分かっていない。しかし総監、課長の線からの出勤依頼だから、かなり重大なことに違いない。

車は赤坂の方へ走って行くと、すぐに右に曲って神社の鳥居をくぐりその横の坂を登った。すると道はそのまま、国会議事堂の見える高台へ登って行く。

もし車の行く先が、国会議事堂だったらおかしなコースを通ったものだ。警視庁の前から皇居のお堀に沿った通りをそのままに行き、三宅坂で曲ればもっと早く議事堂へ行ける。

わざわざ裏側の赤坂へ回る必要はない。一体どこへ行くのだろうと考えていると、右側に崖が出てきた。運転手は何一つ語らない。

上に大きな建物がある。このあたりは、彼らはしょつ中、パトカーで通るからよく分かる。

日本における行政、司法、立法の三権を超越する大権力を持つ首相官邸だ。崖を利用して、非常用の駐車場がある。ふだんは鉄の扉がぴたりしめられ、その鉄の扉の上には、つたの葉がからまり、もう四十年も前の東京大空襲のときの防空壕が、物資貯蔵庫代りに使われて以来、一度もあけられていないのではないかとというような外観を呈している。

ふだんそこを通る何百台、何千台の車の中で、その鉄の扉の存在に気づいている者はいないのではないかと思われるぐらい、目立たない存在だった。

ところがその日は車が鉄の扉の前までやってきて止まったとき、まるでそれを待ちかねたように、扉が中へ開き、そこを車は上手に右折して頭から入って行った。

いったん車の長さだけ、その崖の下へ入ると、お尻のところでは再びしめられ、洞穴の中に入つたときのように、中は真暗になった。

そして、鉄の扉がしまつたのを確認した瞬間、中の電氣が一斉についた。

運転手を除いた全員が一斉に「あっ」と軽い驚きの声を上げた。何でも見通して、いかなる事態にも冷静沈着な岩崎警視でさえ、かなり驚いたらしく周囲をしきりに見回している。自動車が二台並んで悠々通れるぐらいの広さのトンネルが三十メートルほどある。周囲の壁は、白い大理石でできており、天井の照明を反射して輝いている。

一体どこへ連れて行かれるか分からない。ただ大理石が光るトンネルなんて、ひどく豪華な感じがする。それだけに緊張した。

広い地下のホールに出た。車が既に三、四台停っているが、もしその車がなかったら、そこはダンスホールや宴会場にそのまま使用できるような立派な部屋であつた。

奥の部屋へ通じる扉口には、それぞれ、この総理官邸用の制服を着た護衛官が厳しい顔で立っている。

その中の一つ、正面奥に通じる扉には、白い防疫衣を着、頭に白い帽子をかぶり、口を白い布マスクでおおった医師が二人立っていた。

近くへ寄って改めて見ると、背の高さや体つきから、二人の内一人は男、一人は女と分かった。

四人が近寄って行くと、医師はマスクの下にくぐもった声で言った。

「ちよつと危険な病人にお会いしていただきはなりません。それで男女別々に消毒室に入っていただきます。消毒室に入って、完全に消毒し、消毒衣にさえ着替えれば、決して感染の心配はありません。天然痘や放射能のような空気伝染の病気でなく、この病気のウイルスは何らかの形で皮膚に接触しない限りは伝染しませんから。しかし、それでもご心配なら、外で待っていて、私どもを信用した方だけ病室の中へ入っていただくのでもかまいません」

さすがに進藤や乃木、原田はちよつとためらった。

ピストルをかまえた兇悪犯や、血だらけで臓腑がはみ出した死体など、そんなものは一つも恐ろしくない鬼の搜一の猛者刑事も、目に見えないウイルスにはとても勝てない。

ところが、さすがに二十人の猛者刑事をひきいて、二係をまとめている岩崎警視だ。ちよつと見は銀行の出納係にしか見えない、ほっそりした優男だが、度胸は坐っている。

「私は医師を信用して中へ入る。総監からの直々の命令だ。よほどの重大なことなのだろう」

そう言うとはかの三人もあわてた。

「私達も入ります」「私も」

と後に続いた。廊下を隔てて左右に同じ形の部屋があり、左に『男子消毒室』右に『女子消毒室』という札が下がっている。

男二人は男の医師に、女二人は女の医師に連れられてそれぞれの扉の中に入った。

岩崎と進藤はタイル張りの床の部屋の中で、すぐ一切の衣服を脱ぐことを命じられた。二人ともシャツやパンツまで脱いだ。

完全消毒された、ズボン下の長いのと、手首まできっちりおおうシャツを素肌に着こみ足は足袋、手は手袋でおおった。顔にはすっぽりと首筋までおおうマスクをかぶった。

目の前にはアクリルの風防ガラスが張っており、口と鼻の先に当たるところに、空気を通す小孔があいている。後は外部とはすべて、完全に遮断されて、接触することがないようになっている。控えの医師のマスクよりは嚴重だ。

話だけは何とかできる。岩崎が、

「原田も乃木も今ごろは真裸にされているんだろうな」

珍しくそんな冗談を言うと、進藤も少しのつてきた。

「風呂屋と違うんだから、男女別々にする必要などなかったんじゃないですか」

「我々は別にその必要は感じないが、乃木も原田も未婚の娘だ。いくら搜一の猛者で任務のためといっても、向こうの方が差し支えるだろう」

「まことに残念でありましたな」

こんな会話を、現在赤坂署の捜査係にいる岩崎警部補に聞かれたら進藤などは、頼ったが腫れ上がるほど、ひっぱたかれてしまうだろう。

二人がまるでSF映画の主役のような姿で廊下へ出て行くと向こうからも同じような姿をした二人が出てきた。ちょっと見には、男だか、女だかも分からないが、歩くと防疫衣の胸が双つふくらんだり、腰のあたりの線が丸く浮き出したりして、女だということがよく分かる。

もちろん、乃木と原田の二刑事だ。さっきの防疫衣の女医がちゃんとついている。

そのまま進んで行くと、厚い扉があった。扉をあけるとついでにきた医師が、

「中にもちゃんと防疫衣を着た医師やスタッフがおります。私どもはあなた方が出てきたとき、すぐまた消毒するための準備をしなくてはなりませんから、外で待機します」

そう言つて外から扉をしめてしまった。彼らは入らないのだ。中には四人ばかりの男がおり、外から見てもかなり年がいったようなベテラン医師も交じっている。

「いやーご足労をかけました。病氣そのものは、これほどまでに嚴重にしないでいいのですが、この中で起こっているできごと、つまり病氣の名前、かかっている人、それらは国家秘密として嚴重に秘匿しなくてはならないものですから、こうして絶対に部外者は立ち入ることができないような態勢をとったのです。どうか、みなさま方もこの点はよろしくご協力をお願いします」

そう言いながら、完全滅菌された明るい病室へ案内された。中央に寝台があり、そこにすっかり、病み衰えた老人が寝ている。

初めは、それが誰か分からなかった。ここは位置から考えれば、多分総理官邸の地下室であろう。そうなればここにゐる老人は政治家である可能性が強い。政治家の顔というのは、テレビタレントほ

どではないが、実業家や学者などと比べれば新聞に出る機会も多く、よく知られている。

四人は誰だろうかともう一度見ているうちに、一人の男の顔を思い出した。

本当はもっとふくよかで、目付きも鋭く、語気も激しい、現政権党唯一の実力者で、党の金庫を預かり、選挙の対策を一人でする、政経部長のQ代議士であった。

医師団だと思った四人の防疫衣の男の中には、政治家か、公安関係の男が交じっているらしい。

「もちろん、この方のお名前は分かったろう。しかし永久にこのことは、諸君の胸の中にしまってもらいたい。党にとっては掛け替えのない大事な人だが、我々はこの二、三日以内にこの人を、この世から遠い世界へお見送りしなければならぬ。まことに痛恨の極みだ。いかなる方法でもこれは治療することができない病氣だ。しかもQさんは、今も尚意識ははっきりしておられて、自分がおかれている現在の事態をしっかりと認識しておられる」

その男の声が聞こえるのか、病人はしっかりとうなずく。同僚の政治家か秘書か公安係がよく分らないが男の声は続く。

「この会見は、Q代議士からの要請で行われた。これから先は、当人から事情を聞いてくれ」

病人はうなずいた。かすれた、殆ど聞きとれないような声で語り出した。

「私は……これまで、自分の、性の習癖をそれほど……むきになって隠したりはしなかった。女性よりは、青年の方が好きだという、この生まれつきの性癖をな」

しゃべるのも苦しうだが、どうしてもこれだけは語っておかなくてはという一種の氣迫が病み衰

えた老政治家の体にみなぎっていた。さすがに与党のうるさ方の代議士を一手に掌握して有無を言わずに率いてきた人物だけある。

「選挙区の者も、担当の新聞記者も、このことについては一種のタブーとして触れなかった。当然、このことはアメリカのCIA筋にもとくに嗅ぎつけられていたが、個人のスキャンダルを暴きたてる国ではない。対米外交交渉に障害になったことはない。それが……」

急に呼吸が切迫してきた。言葉が発音しにくくなった。

「そ、それが、今度はやられた……」

急に意識が混濁こんだくしてきたらしい。目がうつろになった。ほかの三人の医師団が、瞳を覗きこんだり、脈拍をとったりしたが、

「もう、これ以上は駄目です。頭の中が病菌に冒されて、何か考えられる状態ではなくなりました。ご寿命はまだ二、三日はありましようが、以後は植物と同じ状態でしょう」

これではこの大物政治家が何のため、警視庁の捜一のベテランを呼んだのか、その理由は全く分からない。四人は防疫衣の中からお互いに、困って顔を見合わせていた。

〈アメリカのエイズ〉

名優ロック・ハドソンも、アメリカ中の注目をあびながらついに死んでしまった。